特244
368

# 我が茶室と茶庭

## 並茶道の目的と其の修養

343
343

始

特244
368

# はしがき

茶道は近世多く其の流派の型に捉はれ其の本旨を顧られざるの慨なきにあらず、茲に利休統制時代の本旨を古書に尋ね之を編せり、幸に精神修養の一栞とならば幸これに若かじ。

昭和六年十一月廿六日

再度溪畔松籟庵に於て

十回識

昭和七年十月廿六日 帝國圖書

# 我が茶室と茶庭

## 一、茶道の動き

茶樹は我國固有のものでない。漢土より渡來したものである。傳ふる所では、桓武天皇延暦二十四年に傳教大師が唐から歸朝した時に茶子を携へ來りて、近江國坂本に播種させたのが始まりである。次で平城天皇大同元年に弘法大師が歸朝した時に茶種を持ち歸りて肥前長崎に植ゑ、嵯峨天皇の弘仁六年には勅を以て畿內丹波播磨に茶を植ゑしめた。既に此頃に茶を藥として一般に用ひられたのである。後鳥羽天皇の文治三年に榮西禪師が山城の栂尾の住職明惠上人に茶種を贈り、栂尾の深瀨に植ゑて茶を製し其後蒐道に分植し遂に全國に及ぼすに至つたのである。

茶を用ひ始めたのは約千二百年前聖武天皇の天平元年に內裡に百僧を召し、之に茶を賜つたことが最も古い記錄である。此の時代に僧行基が諸國に茶を植ゑしめて藥用に供したり、藥典寮で茶園を掌つた等の事蹟がある。然るに漸次藥用以外に之を服用することゝなり、後醍醐天皇の建武年間には百服茶と云ふものが出來て品々の茶を點じて六十服も八十服も多くの茶を服して勝負を爭ふことさへ出

來たのである。其の普及は愕くべきもので藥料は變じて賭の爲の喫茶となつた。故に足利尊氏が部下に命じて、茶寄合を制して訓戒を爲した事は建武式目に掲げられてある。其時天龍寺の夢窻國師が筑前崇福寺の什物たる臺子を用ひて茶の湯を始め茶式を創めた。之が後代の茶道の嚆矢である。

茶道は漸次式法を設けて茶と禪とを結びつけて進展し、足利義滿、義持、義政、の頃には喫茶に附隨して大いに古器珍玩を翫ぶに至つた。特に義政は文明十五年に京都東山に慈昭寺（通稱銀閣）を建て、之に茶寮東求堂を設け、和漢の雅器を集め能阿彌、相阿彌、珠光等を侍せしめて、盛に茶會を催した。茶人間には此の東求堂を茶室の濫觴とし、珠光を茶道の開祖と謂はれて居る位である。珠光は義政に茶道は清淨禮和であると說いて居る。

珠光より宗陳、宗悟に傳へ夫れから紹鷗に至つて茶式は一變せられたのである。此頃は戰國亂世であつたにも拘らず、斯道を嗜む武將も町人も數多くあつた。永祿天正に至つては今川氏の家臣で茶碗一個に三千貫（一貫は一兩）を費すものがあり、松永久秀は信貴城に死する時に名器茶壺平蜘蛛を碎いて自盡したと云ひ、又織田信長は豐臣秀吉の中國平定を賞するに乙御前の茶釜を與へ、北國征討に盡した。柴田勝家には姥口釜を以て賞したと謂ふ程に茶の湯の流行は甚しく、爲に他方面には浮華遊興の惡風が附隨して來たのである。

織田信長豐臣秀吉の時代に至つて紹鷗の弟子千利休（宗易）が出でて今迄の弊風を排除し茶道を一新して。細大の式法を完成し佗を主とし贅を戒め清雅を勉め和敬清寂を本意として大革新の實を示した。特に豐臣秀吉は茶の湯を一種の政略に利用し、荒れすさんだ戰國の武將の統一を圖り、武人の爭鬪心を和らげ優遇恩賞、相互娛樂、人心融和、精神修養に用ひた。偶ゝ利休は能く秀吉の意を酌み時機に適した式法を擴め茶道の堅き基礎を大成した。世に茶道中興の祖として利休を推賞するは尤である。

在來僧侶の扱ひ來つた佛家の奠茶奠湯を略して茶の湯と稱するのも實に利休からである。

斯く政略上用ひられた爲に茶道の隆盛は驚くべきものであつて、秀吉の歿後政治の中心は江戸の德川氏に移つても茶道の流行は依然として衰へなかつた。德川氏も亦豐臣氏の故智に倣つて茶道は奬勵された。家康は伊達政宗に饗茶して投頭巾の茶入（肩衝の茶入れで珠光が之を眺め大に其の美に感じて覺えず頭巾を擲つたと謂はるゝもの）を贈り、元和の大阪の役に先登第一の功を立てた松平忠直に德川秀忠から鄙地袋入の茶壺を贈つて勳功百萬石に値すと謂はれたのを、忠直は之れを微塵に碎いて臣下に其の賞を頒つとて其の破片を拾はしめたと云ふ逸話や、宗旦に命じて茶器を東福門院に獻上させたり、井伊直孝の執政の時から毎年山城宇治より茶を調進せしめると云ふ樣に益ゝ高潮となり、諸大名も亦競つて茶道に親しみ幕府の政策を眞似るに至つた。

利休の高弟織部流祖古田重勝の門に天才たる遠州流祖小堀政一が出で、徳川家光の茶道の侍者であり且つ伏見奉行となつて居つた關係で、大に當時の高等政策上からも茶道を鼓吹して盛に諸大名の財を投ぜしめた。政一は利休の本旨に反し侘を遠ざかり、禪とも遠ざかつた頗る華麗やかな茶道を宣傳したのである。從つて本來の民衆的な茶道は遠州流に至つて貴族富豪ならでは之に親しむを得ざるかのやうに推移した。諸大名は世の泰平に馴れて驕奢安逸を恣にすると共に、各派の茶匠は競つて自派の宣傳を勉め、大に茶道の本分をも忘るゝに至つた。十代德川家治の實曆年中には德川幕府に御數寄屋頭三人、同組頭六人、御數寄屋坊主八十九人、御露地者九十九人を算するに至つた。茶事が此頃如何に豪奢となつたかは之にても想像し得らるゝのである。又每年宇治から江戸に送る茶壺の往來に其の道中筋の大名に令して往來を警固せしめ、差添役に御數寄屋頭一人、御茶道二人、御露地者十人、御番衆一人を附して往來したと云ふ事實に徵しても啞然たる外はない。

德川幕府の此の風を見習ふ親藩を始めとし、外樣の諸大名も何れも其の分に應じて茶匠を抱へて之に高祿を與へ、諸藩の御坊主と稱する者甚だ數多く扶持を與へられ、茶道は益々民衆を離れ禪味を失つた。所謂貴族的な形式的な遊樂となつた。

此時山田宗偏の如きは之を見兼ねて茶道の頽廢を嘆じ、革新論を唱へ茶道便蒙抄や茶道要錄を著はし利休の本旨に復さうと勉めたが、如何せん覺醒者は僅少であつて其の時代の風潮と共に骨董いぢりの贅澤遊びと化して仕舞つた。其後松平不昧や白河樂翁の樣な偉人が如何に心膽を碎いても踏み誤つた茶道の矯正には目的を達し得なかつた。

明治維新となつて泰西文明の急劇な輸入に壓せられて、茶道は幕末の頽廢の儘で一時影を潜めたが、國運の進展と共に復舊し來つて、明治の中頃より大正にかけて大いに親まれる樣になり今日に到つたものである。併し惜むらくは德川時代の茶道と趣を異にせず、徒に形式に走つて貴紳富豪の社會遊樂か、閑人隱居の時間と誤解せられ、贅澤な遊びの一に數へられて居るのは慨歎に値する。

細川三齋の言に、茶の道は法を學ぶに在り、道を知るに在り、眞を得るに在りと。これがこの三綱である。

松平不昧の言に、人々がこの道を得てこの道を以て治むる時は天下國家を治むる事の助けともなる。一身を修め清淨潔白を本として、禮樂兼ね備はり親疎貴賤の距てなく一和の業を爲す事である。君が人を使ふにもこれを以て助けとせば、まことに善人を得ること疑ひない。然しこれを爲すためには足るを知ると云ふことが土臺である。而して知足と云ふ事は悟道でなければなか〳〵爲し得ないことである。これが卽ち茶道の根本である。そして又國民教育の大本になるのである。

我校は時代の趨勢に顧みて焦躁なる心を落ち付け、沈着にして勤勞に親しみ忍耐力を養ふ一方法として茶道を科外に課して居るのである。卽ち茶道の目的は小庵に居て薪水の勞を親らし、自得の生活を樂しましむべき精神修養の一助となすに在りとでも言ふべきである。

## 二、茶系と茶會

足利時代に僧珠光に次で武野紹鷗が出でて茶道を組織立て、其の跡に卓絶奇才の千利休が出でて之を大成したものである。故に利休以前には流派と謂ふ樣なものはなかつたのであるが、其の普及と、隆盛なるにつれて利休門の達人の弟子や其の後裔が何流何派と云ふやうに分れたのである。併し何れも根本は違はないが枝葉が少しづつ變つたに過ぎない。要するに茶室や茶庭は其の使ひ勝手の相違とそれ〴〵の茶匠の嗜好とで種々の形態のものが出來たのである。故に現時茶道の諸流として知られて居るものは、千家ならざるはなしと謂つても過言でない。現今流派の主なるもの二十四だけ掲ぐれば、

瑞穗流　玉置一鳴の末
藪內流　下も流と稱する藪內紹智の末
織部流　古織流とも云ひ古田織部正の末
南坊流　南坊宗啓を流祖とする
有樂流　織田有樂を流祖とする
三齋流　細川忠興を流祖とする
石州流　片桐貞昌を開祖とする
遠州流　小堀政一を開祖とする
宗和流　金森宗和の末流
久田流　久田宗全の末流
貞置流　堀田貞置の末流
宗偏流　山田宗偏を祖とする
普齋流　杉本普齋を祖とする
松尾流　松尾宗二を祖とする
速水流　速水宗達の流れをくむ
庸軒流　藤村庸軒の流れをくむ
不白流　川上不白を開祖とする

鎭信流　松浦鎭信を開祖とする
怡溪流　怡溪を開祖とする
雲州流　松平不昧の流れをくむ
圓乘坊流　圓乘坊宗圓の流れをくむ
伊佐流　伊佐幸琢の流れをくむ
阿部流　阿部休巴を祖とする
大口流　大口恕軒を祖とする

我校では千家裏流の千宗室氏に茶道を囑託して居るのである。

茶會には左の別がある。

朝茶　天明後に始めるもので夏季に多い
夜込　酒飯中若くは中立ち頃に消燈してもさのみ暗くない程度に夜の明ける時刻
夜詰　秋の末から冬にかけて夜長の時に日暮れ早々から始める
正午　午前十一時頃にし晝食を饗する
跡見　豫定の客が濟み歸つた跡に茶器其他を見んが爲の會



不時　臨時の會
柴火　庭や海岸別莊などで樹の枝に釜をかけ圓座を敷いて客居とし園遊會的のもので野掛けを云ふ。

季節から分ければ大福（正月元日より十五日まで）春（正月十五日以後）名殘（八月末より九月まで古茶の名殘）口切（新茶の口切）等により又それ〴〵差違があるから、茶室も茶庭もそれ〴〵の使ひ勝手を考へて設計する必要がある。

## 三、茶室

茶室の大きさは一定のものではない。二疊より何疊でも點茶をなし得れば茶室である。普通四疊半以下のものは數寄屋と謂ひ、四疊半以上八疊以下のものは小間と稱へ、八疊以上十二疊半を廣間と呼び、十二疊半以上は大廣間と云ふて居る。決して其の廣狹大小に因る制限はないのである。紹鷗時代以後利休が佗を主とする趣旨から、素朴な狹小の室を好んで用ひたので、斯道を嗜む人々も之に倣つて好んで小さな室を用ひたところから、今日まで殘存する茶室の多くが四疊半以下のものが多いのである。此の四疊半なるものは珠光が東山殿正寢十八疊の室を四分の一に圍つて茶事を催したのに始ま

ると謂はれて居る。又一説に鎌倉柳營御殿の十八畳を屏風を以て四分の一に圍ひ、四畳半として點茶したるに因り、茶室を圍とも云ふと説いて居る。

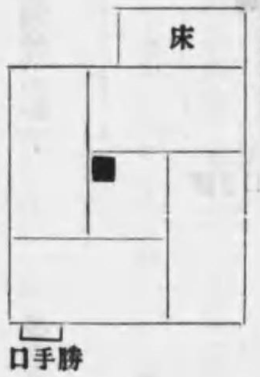
茶室は世俗に茶席とも云はれて居る所から略して席とも云ふ。又數寄屋と云ふは母家と離れて別棟に建てられたもので物の備はらざる事より謂ひ、決して珍奇な意匠や變態の材料を用ひて構成したものとの意味は毫もないのである。古田織部正や小堀遠州などが曲り具合柱を用ひたから數奇を物數奇に豪を耀かし奇を現はすと云ふ意味に謬られたのである。圍とは本家に連結して造られた茶室を云ふ。

又茶室は決して窮屈な束縛もないのである。連子窓がなくとも、躙り口がなくとも、天地人の三段の天井を必要とするだの、下地窓のないのは茶家らしくないなどと謂ふ譯はない。現在殘存する名席の中にも幾多の斯かる實例はある。

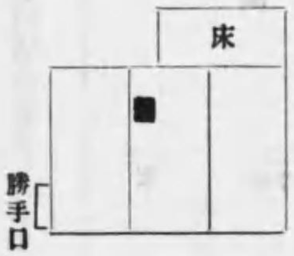
最初は茶式に臺子を用ひて點茶したものを、利休が小間四畳半に其の臺子の法に順據して爐を切り、其の側に茶道具を置合せて點茶する方式を組み出したのであるから、後世に四畳半が點茶の基準であるかの様に思ふのは無理からぬことである。小なるものには一畳臺目の點茶法があるのである。

茶室には爐の切り具合に依つて本勝手と逆勝手の區別が起る。即ち客が主人の右手に並ぶやうになる場合は本勝手と云ひ、客が主人の左手に並ぶやうになる場合を逆勝手と呼ぶのである。又畳にも床前は貴人畳(又は床前畳)、客の座るは客畳、茶道具を置き卓などを飾る畳を道具畳、爐の切つてある畳を爐畳、通ひ口から直ぐの畳を踏込畳と稱へるが、四畳半以下の室は一つの畳で道具畳と踏込畳とを兼ねると云ふ様に雜多である。

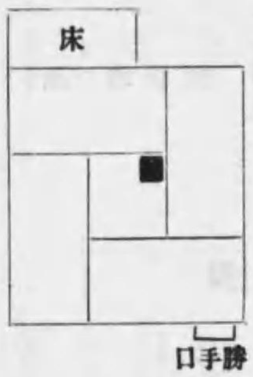
四畳半本勝手



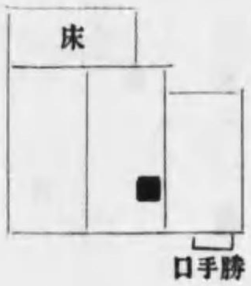

三畳臺目切本勝手

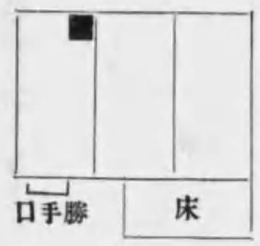



四畳半逆勝手

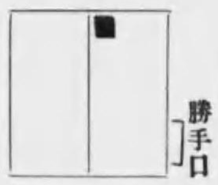



三畳臺目切逆勝手



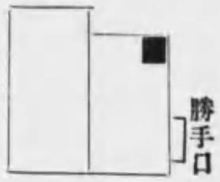



三疊向切本勝手

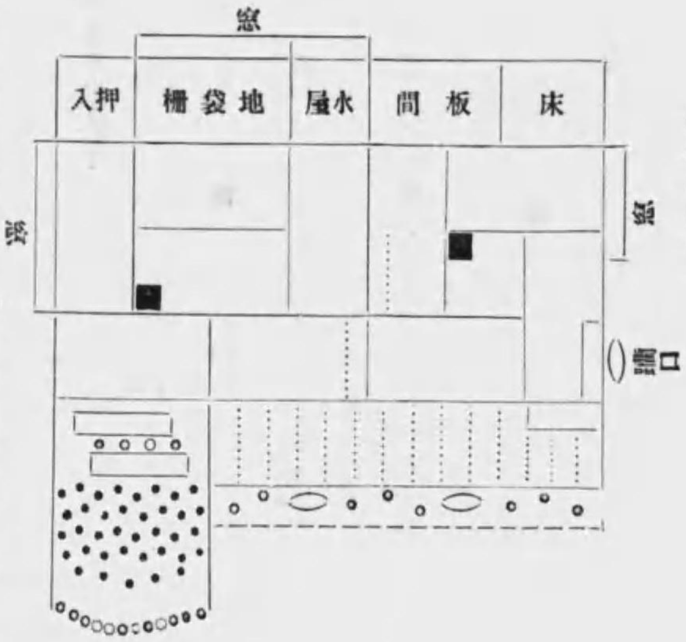



二疊向逆勝手

二疊隅爐本勝手




一疊臺目隅爐逆勝手




爐。紹鷗時代以前は多種多様であつた。大爐は一尺八寸四方中爐は一尺六寸四方で、之等は昔の大形の遺型である。紹鷗と利休が協議して一尺四寸四方と謂ふものを定めたのである。これが疊の長さ六尺三寸の九分の二に相當し、大臺子の風爐の座の寸法に相當する。併し紹鷗も田舍間（一間を六尺とした室）には一尺三寸四方とした爐を用ひて居つた位であるから、關東地方では一尺三寸角を用ひられて居る。又丸爐と云ふものもある。

爐縁。之には木地の儘のものも漆塗のものもあつて茶道創設の初期には殆ど木地であつた。其の木は澤栗を用ひたのであるが、其後に塗り縁を用ひられたので必ずしも定例とてはないのである。

床。床の位置は別に制限はない。又妙喜院の床は塗床珠光院の床は平板を入れたもの其他種々あつてどうせねばならぬと謂ふことはないやうである。

躙り口。皆如庵の如き貴人口と躙り口の二つを列べたものもある。これは必ず造らねばならぬと云ふ程のものでもない。始めは佗を主とし、それにふさわしく設けたに過ぎない。鬼瓦席や慈昭院の茶室は設けられてない。又其の寸法も幅一尺九寸二分高さ二尺二寸五分と一定されて居る樣に傳へて居るが、之も制限はない。山崎妙喜庵の待庵は利休の造られたものであるが、高さ二尺六寸一分横二尺三寸七分の大きいものである。普通は高さ二尺一寸八分乃至二尺二寸七分幅一尺九寸五分乃至二尺一寸位に適當に取れば宜しいと思ふ。

屋根。屋根も何で葺いても制限はないやうである。有名な護國院の茶室は瓦葺である。天球院の茶

室は板葺である。其他柿葺もあれば、樹皮を用ひられたのもある。又茅葺もあつて必ずしもせ何にせねばならぬと云ふこともない。我校は都會地の建築關係からスレート葺にしてある。

## 四、茶　庭

茶事は元來贅澤でもなく又骨董の翫でもないのを、德川時代半ばよりの遊興的の慰みに誤まられた爲に、茶庭も大いに横道に入り込んだのである。世に茶庭と云へば洞ろの樹木や奇體變木を植ゑ、珍妙な燈籠や石を据ゑるものゝ様に誤解されてしまつた。茶庭と云へば茶室への通り路に沿ふて風景を設けて客に落付いた塵外の感あらしめる様に、あり合せの材料で造ることそ其の要旨である。利休の言葉に「佗るは善し佗たるは惡し」とあるやうに無理に山野らしく造るのは良くない。利休が宗啓への答に、

釜一つ持てば茶の湯なるものを
　　よろづの道具このむはかなさ

茶庭に限らないが造園の型は大體四種あるやうである。

1　天然の實景を模したる天然山水



2　幽邃を目的としたる假山水

3　水なき處に水ある様に粧つた沽山水

4　山水に因らずに造つた平庭

利休の道歌に、

露地は只浮世の外の道なるに
　　こゝろの塵をなどちらすらん

茶庭は露地(路次又露路廬地とも書く)と呼ばれて、茶室に至るまでの庭を通る部分を謂ふのである。そして内露地と外露地の二に稱へられて居る。これは小堀遠州の頃から彼是と謂つたやうである。外露地とは庭門以内の部分で茲に袴着、下腹雪隱などを設け、内露地には中潜り、内待合、蹲踞、手水鉢などを置くのを定式茶庭と呼ばれて居るが、これも後世の事である。紹鷗の歌に、

心とめて見ねばこそあれ秋の野の
　　しばふにまじる花のいろ〳〵

我校の茶庭は自然を主として、歩み易きやうに石を置き、夜光りを要する所に燈籠を据ゑ、中潜りなどは特に設けず、樹木で内外露地は自ら區別されて居る。蹲踞は懸樋として水を引いてあるが、可

成技巧を避けたのである。

## 五、茶道の修養法

茶道の作法は其の流派に依つて種々の型を唱へらるゝが、啻に無理解に其の作法を修むるは複雑を感ずるか、或は窮屈を感ずるのみで心身修養に於て何の効果も得ないのみか有閑なる者の遊樂としか見られない。之が爲か茶道は時代錯誤とまでの批評を敢てして憚からざる人さへある位である。これは其の技曲的の型ばかりを觀て其の本旨を究めざるの致す所である。此の焦躁なる時代に當りては其の感得や行動の敏捷は求むべきも精神まで外界の刺擊に伴ひ衝動的となつてはならない。必ずや不動の精神を以て選擇的行動でなければならぬことは申すまでもない。我校では將來の女性の修養として精神はどこまでも堅實なる落付きを保ち其の行爲は能率の增進を圖りて過誤なきを期せねばならぬことを常に訓練の要旨として居る關係上千宗易時代の心身統一的茶道の作法を攻究するに其の根本義に於て我校訓練の要旨と相一致する點多きを認識し左の三項を要諦とし理解を先にし心身鍛錬の一方法として採用せり。

一、精神を落付くること



二、能率の增進を圖ること

三、過誤なきを期すること

左に千宗易の統制せし茶道の大要を記し修養の便に供す。

### 四疊半本勝手風爐初炭手前

一、風爐の据方は道具疊の眞中下りて小板を置き、左は疊の目五つ七つ又は九つ目の所に据へ置く。

二、茶道口に座し、兩手にて炭斗を持ち右足より入りて炭斗を風爐の右脇に置き、左膝より立ち右へ廻りて左足より茶道口を出づ、本勝手席の茶道口の出入總て同じ。

次に灰匙の柄を横にして灰器に入れ、其の柄の向を右手に持ち出て膝を風爐の正面より少し左方へ向け座して灰器を左手に持ち替へ道具疊の下位の左隅に置き、膝を風爐の正面に向け居前を定む。

三、次に第一圖の如く右手にて羽箒を取り風爐と炭斗との間に置き、同じく右手にて鐶を取り炭斗の眞前に置き、又右手にて火箸を取り羽箒の左に置き、更に右手にて香合を取り出し左掌の上にて扱ひて小板の左前角の疊の上に置き次に釜の蓋を閉づ、若し共蓋の釜なるとき又は婦人は服紗

を捌き釜の蓋を閉ぢ直に服紗を帯に狭む。

四、次に右手にて鐶を取り一方を左手に渡し兩手にて同時に釜へ鐶を懸け置きて右手にて釜敷を取出し左手に渡し更に右手に持ち替ゆると共に打返し炭斗の前少し右へ寄りたる所に置き一膝向ふへ進みて兩手にて鐶を持ち釜を取り下ろし釜敷の上に置き、其の儘一膝客付へ向き直り釜を下座へ引き寄せ置き鐶を外づして二つながら右手に持ち釜の下位に置く。

五、然る後膝を風爐の正面へ向け右手にて羽箒を持ち圖の(イ)の如く風爐を箒き羽箒を炭斗の前に手なりに置き火箸を取り右膝先の疊の上に突き持ち替へて下火を直す、其後火箸にて胴炭を狭み左手を火箸に添へて風爐の前の方に入れ次に右手を離してギッチョウ管炭、枝炭、止炭を順次に次ぎ終りて火箸を右膝先にて前の如く突き持ち替へて炭斗の中へ初めの如く入れ置き、同じく右手にて羽箒を取り圖の(ロ)の如く箒き羽箒を元位に置き、一膝左方へ向け左手にて灰器を取り右手に持ち替へ風爐の正面に持ち廻りて左手を灰器の左に添へて膝前に置き、更に右手にて灰匙を持ち左手を添へて火口の灰に月形を切り其の掬ひ取りたる灰を風爐中向ふの方へ蒔き灰匙を灰器に返し右手にて灰器を取り上げ一膝左方へ向け灰器を左手に渡して元位に置く。

六、次に風爐の正面に向き直り右手にて羽箒を取り圖の(ハ)の如く箒きて羽箒を炭斗の上に載せ右手にて香合を取り左掌に載せ、右手にて香合の蓋を取りて右膝先の疊の上に置き、火箸を取り蓋の右方乃ち疊の眞中にて突き持ち替へて香を狭みて一つは火の中へ一つは炭の上に焚きて火箸を炭斗の中に入れ香合の蓋をなす。

七、此の時上客は香合の一覽を求む、亭主之を受けて其の儘一膝客付へ向き香合の前向ふを正して貴人疊の手近の隅の所に出し置く。

次に鐶を取りて釜に懸け其の儘鐶を持ちて釜を膝前まで引き付け置き居前に向直り再び鐶を持ちて釜を風爐に懸け右手にて釜敷を取り打返して左手に渡し更に右手に持ち替へ炭斗の中に初めの如く入れ、次に鐶を釜より外づし右手にて合せ目を持ち炭斗中前の方へ入れ一膝下りて羽箒を取り釜の蓋をヲの字形に箒き羽箒を前の如く炭斗の上に載せ釜の蓋を切りかけ置く（共蓋又は婦人は服紗にて釜の蓋を扱ふ）

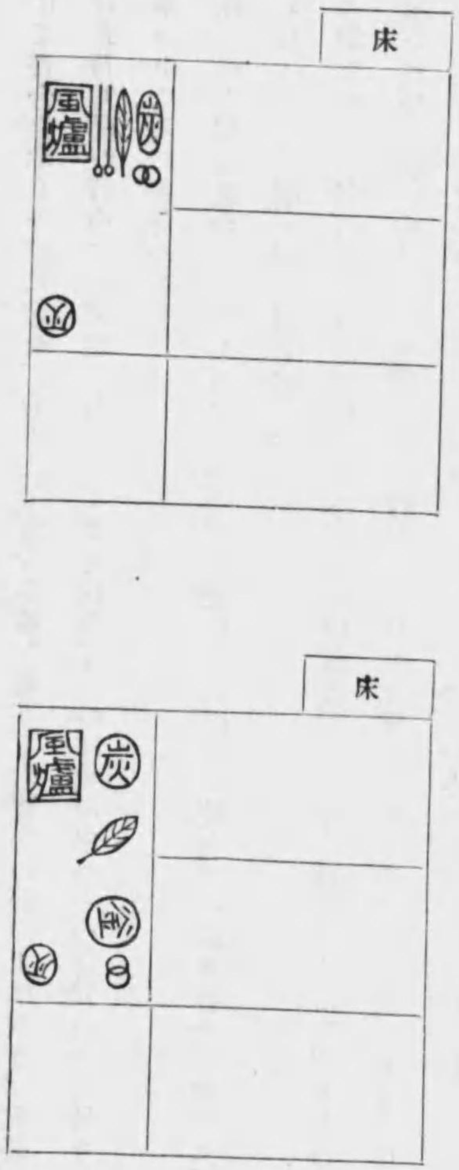
八、次に一膝左方に向け左手にて灰器を取り初めに持ち出したる時の如く右手に持ち替へ立ちて左へ廻りて勝手へ引く次に入りて兩手にて炭斗を持ち引退く。

九、亭主灰器を引きたる後上客は前へ進み香合を取り右膝先の所に置きて控へ居り、亭主炭斗を引き去りたる後禮して香合を疊の縁外に置き一覽して次客の右膝先の所へ送る、次客以下之に準ず

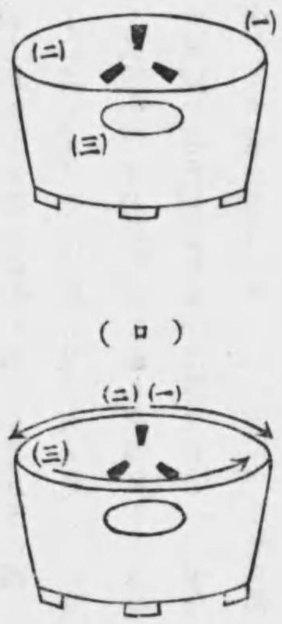
末客終れば上客並に末客は共に進み出會ひて末客は上客に香合を返し席に復す、上客之を取り上げ前向ふを正して貴人疊の次疊の一方の所へ返す。

十、香合返らば亭主は香合の前に進み出で客に正面して座す、上客は一禮し亭主之に答禮して右手に香合を取り左掌へ載せ右手を香合に添へて勝手へ引き茶道口に座し一禮す、

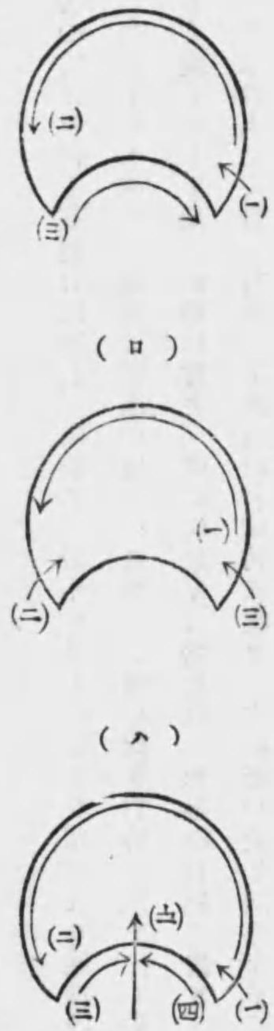
十一、切懸け風爐、鐵風爐、朝鮮風爐、搔風爐等總て蒔灰を爲さゞる風爐には灰器を用ひず、又火口の小さき風爐は炭を次ぎたる後に(ハ)の如く箒きて火口を一度箒き普通なれば火口を二度極めて大なる火口は三度箒く。




眉風爐掃方



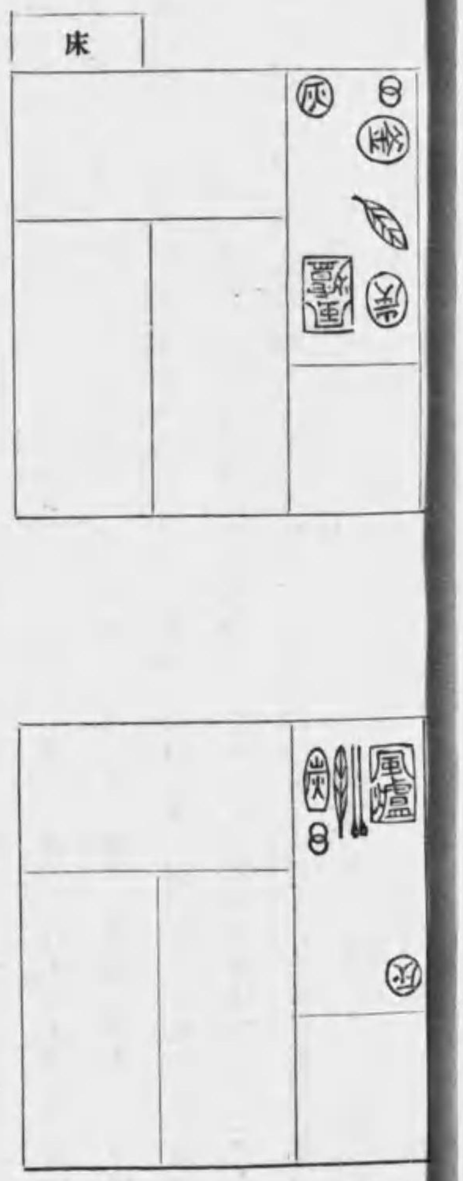

土風爐掃方



## 四疊半逆勝手風爐初炭手前

一、服紗を帶の右に付けて茶道口に座し、兩手にて炭斗を持ち左足より席に入り風爐の左脇に置き次に右手に灰器を持ち同じく運びて定座に置き、風爐の正面に向き羽箒を左手にて炭斗の右脇に置き、同じく鐶を取りて炭斗の前に置き、次に同じく火箸を取り羽箒の右脇に置き、右手にて香合を取出し左掌の上にて扱ひ右手にて風爐の右前角に置き、次に釜の蓋を閉ぢ左手にて鐶を取り一つを右手に持ち共に釜に懸け置きて左手にて釜敷を出し打返して右手に渡し更に左手に持替へて炭斗の前少し左方へ置き、一膝進みて釜を上げ定座に引き付けて後居前に向き左手にて羽箒を取り右手に渡し風爐を本勝手の時の如く箒き左手に渡して炭斗の前に手なりに置き、左手にて火箸を取り右手に渡し下火を直し炭を次ぎ火箸を左手に渡して炭斗の中に入れ前の如く羽箒を取り本勝手の如く風爐を箒き羽箒を元に返し灰器を取り灰匙を右手に持ち月形を切り灰器を元位に返し羽箒を取り風爐を箒き羽箒を炭斗に置き右手にて香合を取り左掌に載せ蓋を取りて右膝前に置き同じく右手にて火箸を香合の蓋の右の方に突き持ち替へて香を挾みて香を焚き火箸を元の如くして炭斗の中に入れ香合の蓋をなす、此時上客は香合の一覽を求むる等以下本勝手の打返しとす。






## 四疊半本勝手風爐後炭手前

一、後炭手前は枝炭を炭斗の前の方に逆しまに立て置き、胴炭を除きて炭を常の如く組み置く。

二、常の如く炭斗持出し定座に置き、次に灰器を運び出して初炭手前の如く置き風爐に向ひて座す。

三、次に常の如く羽箒を風爐と炭斗の間に置き、直ちに香合を取出して小板の左前脇に置き釜の蓋を閉づ、次に鐶を釜に懸け置きて釜敷を出し三手に扱ひ炭斗の前に置き、一膝向へ進み釜を取上げ釜敷の上に載せ一膝客付へ向き直り釜を初炭手前に同じく引寄せ鐶を外づして釜の下位に置き

居前に向き直る。

四、次に羽箒を切り常の如く箒き炭斗の前に斜に手なりに置き、火箸を取り下火を直し炭をつぐこと初炭手前に同じ、下火の都合に依りて枝炭管炭を共に挾みつぎても宜し。

五、炭をつぎ終らば風爐を箒き羽箒を元に置き、灰器を取り前に置き灰匙にて蒔き灰を掬ひ初炭の節切り取りたる月形を埋めて灰匙を灰器に戻し灰器を元位に返し置き、羽箒を取り風爐を箒き羽箒を炭斗の上に置き香合を取り左掌に載せ火箸にて香を焚き火箸を元に返し香合の蓋を閉ぢて炭斗の中に入る（但し初炭の節用ひたる香合と異なる時は客は一覽を求む）

六、亭主香合を炭斗の中へ入れ客付に向き釜に鐶を懸けて炭斗の前まで引き付け置き、鐶を外づして釜の下座に置く、客は此の時風爐中の一覽を求む、亭主之を受けて居前に向き直り一膝左方に向き灰器を持ち勝手に出で水次の口に蓋置きを差込み茶巾を能く濕し疊みて蓋の上に載せ水つぎの口を左向きに爲し膝前に置き茶道口に座し客の一覽を終り席に復するを待ち右手にて水つぎの把手を持ち左手を底に當て持ちて釜に向ひて座し其儘鐶の下位に置き右手にて茶巾を釜の蓋の上に置き、同じく右手に蓋置を取り左手にて扱ひ右手にて釜の前に置き茶巾にて釜の摘みを持ち蓋を蓋置の上に置き茶巾を取り左手に持たせ水つぎの口に當て右手にて水次を取り上げ釜へ水をつ



ぎを元位に置き茶巾を右手にて持替へ釜の蓋を取り蓋を閉ぢ茶巾を其儘蓋の上に摘みを外づして載せ置き、右手にて蓋置を取り左にて扱ひ元の如く水つぎの口に差込み置き右手にて茶巾を取り左手にて蓋の摘みを押へ茶巾にて蓋の向ふを拭ひ、次に前を拭ひ左手を外づして同じく右手にて茶巾を持ちたる儘釜の鐶付より鐶付までの向ふを拭ひ同じく前を拭ひ續いて前を半ば拭き戻して茶巾を水つぎの上に置き水つぎを前の如く持ちて勝手に退く。

七、次に入りて風爐の前に座し釜に鐶を懸け風爐に釜を掛け釜敷を炭斗に入れ鐶を外づして同じく炭斗に入れ一膝下りて釜の蓋を切り一膝右に寄り炭斗を持ち勝手に退き一禮す、其他初炭手前に準ず。

## 四疊半本勝手風爐薄茶點前

一、茶道口に座し襖を開き水指しを兩手にて持ち立ちて右足より席に入りて風爐の右脇鐶付きの所に置き左膝より立ちて客付に向ひ廻りて茶道口を左足より出づ。

二、次に右手に茶入を上より半月形に持ち左手にて茶巾、茶筌、茶杓を組入れたる茶碗を持ち胸の高さに並べ持ち水指しの眞を割りて前に置き合はし前の如く立ちて茶道口より出づ。

三、次に建水の中に蓋置きを入れ柄杓の合を建水の縁に俯向けて掛置き柄の右脇を左手にて持ち風爐に向ひて疊の眞中に坐し建水を左膝脇に置く。

四、左手にて柄杓の節の所を持ち膝の眞中にて右手を添へ柄杓を構へ右手にて杓の柄の内側より蓋置を取り小板の左前角の疊の上に置き右手に柄杓を持ち替へ蓋置の上に置き　柄は膝の方へ斜に引き直ちに建水を少し前へ進めて居前を正す。

五、次に右手にて茶碗の右横前の所を取り膝前に持ち來り左手にて茶碗の左横を持ち更に右手にて茶碗の右横に持ち替へ膝前の下に置き直ちに右手にて茶入を取り茶碗と膝との間に置き、次に左手にて腰の服紗を取り服紗捌きを爲し疊みて右手に服紗を持ちたるまゝ左手にて茶入を持ち蓋を拭ひ水指しの前の少しく左へ寄りたる所乃ち元茶碗の在りし所に置く、又服紗を捌き直し疊みて左掌に載せ右手に茶杓を持ち服紗にて茶杓を三度拭ひ茶入の上に置く、其儘直ちに右手にて茶筌を出して茶入の右脇に置合し茶碗を少し前に引き寄せ置きて服紗を帶に挾む、右手にて柄杓を取り左手にて節の所を持ち膝の眞中にて右手を添へ構へて右手にて釜の蓋を取り蓋置の上に置く。婦人又は釜共蓋なる時は茶碗を前に引き寄せ直ちに服紗を左手の食指と中指の間に挾み柄杓を取り構へて右手にて服紗を持ち服紗にて釜の蓋を摘み取り服紗を柄杓の柄の内側よりして建水の後へ手なりに置く、以下爐風爐共同じ。

六、次に右手にて茶巾を出し釜の蓋の上に載せ置き右手に柄杓を持ち替へ湯を汲みて茶碗に入れ柄杓を釜の上に仰向けに置柄杓を爲して懸け置き右手にて茶筌を取り左手を茶碗に添へ三分の一づつ廻しては茶筌を上げ三度茶筌投じを爲し茶筌を洗ひて茶筌を元の所に置き右手にて茶碗を取り左手に持ち替へ湯を建水に捨て茶碗を持ちたるまゝ右手にて茶巾を取り茶碗の中に入れ茶巾を以て茶碗の縁を挾み拭ふこと三度半、茶巾を縁より外づし茶碗の中に入れ元の如く疊みて中を拭ひ茶巾を茶碗に入れたる儘茶碗を右手に持ち替へ膝前に置き同じく右手にて茶巾を取り出し釜の蓋の上に元の如くに置く。

七、右手に茶杓を取り右膝先の所に持ちたる儘左手にて茶入れを取り茶杓を握り込みたる儘茶碗の左縁の所にて茶入れを取り蓋を茶碗の右脇少し膝前によりたる方へ置き茶杓を以て茶を掬ひ茶碗に入れる最も三杓までとす。次に茶杓に付きたる茶を茶碗の縁にて拂ひ茶杓を握り込みて茶入れの蓋を爲し茶入れを元位に返し茶杓を元の如く其の上に載せ置く。

八、次に右手にて水指の蓋を取り左手にて蓋の前縁を持ち又右手にて左縁に持ち替へ摘みを右にして水指しの左方に立て掛け置き右手にて茶柄を取り湯を汲みて茶碗に凡そ半杓程注ぎて加減を計

り殘りの湯を釜に戻し柄杓を釜の上に切柄杓を爲して置く。

九、次に右手に茶筌を取り左手を茶碗に添へ茶を點じ左手を放し同時に茶筌を元位に置き右手にて茶碗を取り左掌に載せ右手にて茶碗の向きを持ち前へ廻し茶碗の向ふ前を定め右手にて膝先きの客疊へ出す。

十、亭主茶碗に茶を入れたる時に上客は菓子を頂く旨を述べ會釋し次禮して菓子器を取り頂きて前に置き懐紙を出して同じく前に置き菓子を紙の上に取り菓子器を一見して次客へ廻す。以下同じ末客取り終れば之を亭主の方へ出す場合に依り末客に止どめ置くもよし、而して後に上客より仕舞の挨拶を爲したる時に末客は菓子器を上客の所へ返し置く、上客は菓子器を右の方へ戻し置く。

十一、茶碗出づれば上客出でて茶碗を取り疊の縁の内次客との間へ置き次禮を爲し茶碗を膝前に置き點前に挨拶を爲し右手にて茶碗を持ち左掌に載せ右手を添へ茶碗を頂き次に右手にて碗の向を持ち前へ廻して茶を呑む、終れば右手の拇指と食指とにて呑口を拭ひ茶碗を疊の縁外に置き一見して後茶碗の前向を正し呑み口を下座に向け亭主の出だせし所へ戻し置く、次客以下は茶碗取込み上客に一應進めて後次客へ進むるのみにて其他同じ。

十二、亭主服紗にて釜の蓋を取りたる節には上客の一口呑みたる時右手にて服紗を取り帶に挾み控



へ居る、茶碗返れば右手にて茶碗を取り左掌に載せ呑口を見て直ちに膝前に置き湯を柄杓に半分汲み茶碗に入れ柄杓を釜の上に初めの如く置柄杓を爲して置く、茶碗を右手にて取り上げ左に渡し湯を建水に捨て茶巾を取り茶碗を拭ひ茶を入れ點じて出すこと前と同じ。

十三、亭主茶碗の湯を建水に捨てたるとき上客より仕舞ひ呉れとの挨拶あれば亭主は右手にて茶碗を膝前に置き御湯でも如何かと述べ、上客竝に亭主は互に挨拶を爲し右手にて柄杓を上より取り て左手にて扱ひ持ち替へて水を汲み茶碗に入れ柄杓を釜の上に引柄杓を爲して載せ置く、右手にて茶筌を取り左手を茶碗に添へ茶筌を洗ひ後二度茶筌投じを爲し茶筌を元位に置き右にて茶碗を取り左手に持ちたる儘右手にて茶巾を取り茶碗の内に入れ又右手に茶碗を持ち替へ膝前に置き右手にて茶筌を取り茶碗に入れ茶杓を取り右膝先の上に持ちたる儘左手にて建水を少し後へ引き直ちに左手にて服紗を取り茶杓を握り込みて服紗捌きを爲し疊みて左掌に載せ茶杓を二度拭ひ俯向けて茶碗の上に初めの如く掛け置き右手にて其儘直ちに茶碗を少し左向ふへ寄せ同じく右にて茶入れを取り茶碗の右脇に疊の眞を割りて置き合し後服紗を建水の上にて拂ひ帶に挾む。

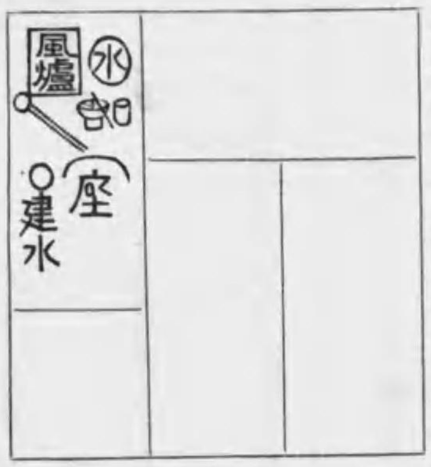
十四、次に右手にて柄杓の柄を上より取り左手にて扱ひ水を汲みて釜に入れて後直ちに柄杓を構へて右手にて釜の蓋を閉ぢ柄杓を右手に持ち替へ蓋置の上へ初めの如く引く。

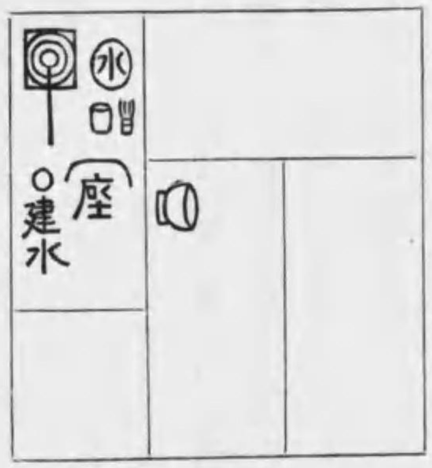
十五、水指の蓋を右手にて取り左手にて扱ひ右手にて蓋を閉ぢ右手にて柄杓を取り上げ左手にて扱ひ右手にて柄を横にして節の所を握り込み左手にて蓋置を取り右手の拇指と食指とにて之を持ち一膝左へ向きて左手にて建水を持ち左膝より立ち左へ廻りて勝手へ初めの如く出で又入りて茶入茶碗を持ち右へ廻りて勝手へ引き次に入りて水指を持ち同じく勝手に出で勝手口に座し一禮す。

十六、上客茶入、茶杓の一覽を求めんと欲せば亭主水指しの蓋をなしたる時に所望すべし、亭主之を受けて柄杓を右手にて取り左手にて柄杓の柄の裏を持ち建水の上に俯向け合を建水の縁を外づして載せ置き右手にて蓋置を取り左手に渡し柄杓の柄の下建水の後ろに置き右手にて茶碗を取り疊の左方に假置し右手に茶入を取り左掌に載せ一膝客付へ向き直りて茶入れを膝前に置き左手にて服紗を取り捌き疊みて右に持ち左手にて茶入れを取り服紗にて拭ひ服紗を握り込みたるまゝ茶入れの蓋をあけ蓋の裏を調べ下に置き服紗を其儘打返して茶入れの縁の向ふ竝に前を左より右へ拭ひて茶入れの蓋を閉ぢ服紗を膝前に置き茶入れを左掌に載せ右手にて茶入れの向ふ前を正し茶入れの前を客の方へ向け圖の所へ出し服紗を帶に挾みて風爐の正面に向き直り右手にて茶杓を取り左手に持ち前の如く一膝客付へ持廻りて右手にて茶杓を向ふへ向けて持ち茶入れの右に竝べ置く、次に又風呂に正面して左手にて柄杓を取り右手に持ち替へ前の如く蓋置き竝に建水を持ちて勝手へ出づ。

十七、亭主建水を引かば上客は前へ進み茶入れ茶杓を取込み茶入を右膝脇に置き茶杓を取り更に茶入れの右脇に竝べ置く、亭主水指を運び去りし後上客は次禮して茶入を疊の縁外に置き一見して次客の右膝先の所へ送る、次に茶杓を採り一見して同じく次客に送る末客一覽し終れば上客竝に末客は共に前へ進み出會ひて末客は茶入を上客の右膝の方へ返し茶杓を左膝の方へ返して席に復す、上客は之を採りて初め亭主の出したる打返しに置竝べて返し席に復す。

十八、茶入、茶杓返れば亭主は出でて兩器の前に正面して座す上客は一禮す、亭主答禮して右手に茶入を取り左掌に載せ更に右手にて茶杓の中央を持ち茶入と竝べて勝手に退き茶道口に座して一禮す。



## 四疊半本勝手風爐濃茶點前

一、初め風爐の右脇に水指を置き茶入を其の前に莊り置く。

二、亭主茶道口を開け茶碗を左掌に載せ右手を添へて胸の高さに持ち風爐に向ひ疊の眞中に座し左手にて茶碗を疊の左方へ假置し右手にて茶入を少し右へ寄せ左手にて茶碗を取り上げ右手にて扱ひ更に左手に持ち替へ茶入の左へ置合す。

三、次に建水を持出し茶道口を閉ぢ定座に進み着座し左手にて柄杓を取り膝の眞中にて構へ右にて薄茶點前の如く蓋置を出し小板の左前角に置き柄杓を其の上に引き主客共に總禮す、次に建水を少し向へ進め居ずまいを正す。

四、右手にて茶碗を取り左手にて扱ひ更に右手に持ち替へ膝前に置き直に右手にて茶入を茶碗と膝との間に置き兩手にて茶入の袋の緒を解き打留を左方へ向け右手にて袋の口を押へ左手にて打留を引き出し袋の口の向ふを延ばし次に前を延ばし後右手にて袋の儘茶入を左掌に取上げ右手にて袋の口の右を外づし左を外づし茶入を袋より取出して茶碗と膝との間に置き兩手にて袋の口を延ばし右より左へ打返て右手にて水指しと風爐との間少し向ふへ寄りたる處に置く、袋の打留は水指の方へ向け置く。

五、服紗を取り四方捌きをなし薄茶點前の如く疊みて右に持ち左手にて茶入を取り上げ蓋の向ふ並に前を二文字に拭ひ續いて服紗を茶入の横に當て茶入を右廻しに拭ひ茶入を水指の前少し左方へ寄せたる方へ置き服紗を常の如く捌き直して左掌に載せ右手にて茶杓を取り三度拭ひ茶入の上に蓋の摘みを右にして置く、次に茶筌を出して茶入の右方に置き合す、次に服紗を左手に持ちたる儘右手にて茶碗を少し前へ引き寄せ服紗を其の儘二つに折返し右手に持ち小板の右前角を二文字形に拭ひ服紗を左手に持たせ茶巾を右手にて取り出し逆手にして小板の上の拭ひたる處に置き服紗を帶に挾む。

六、小板を用ひずして燒物又は木地等を用ひたる時は水指の蓋を服紗にて拭ひ茶巾を置く、又水指の蓋木地又は共蓋なる時は拭ふに及ばず直に茶巾を其の上に置く。

七、次に右手にて柄杓を取り左手に持ち構へて釜の蓋を取り（婦人又は共蓋は薄茶點前と同じ）蓋置の上に置き湯を茶碗に汲み置柄杓をなして釜の上に載せ置き右手にて茶筌を取り茶筌投じを薄茶の如くなして茶筌を元位に置き右手にて茶碗を取り左に渡し湯を建水に捨て右手にて茶巾を取り茶碗を薄茶點前の如く拭ひ右手にて茶碗を膝前に置き茶巾を取り出し釜の蓋の上に置き右手に

て茶杓を取り左手にて茶入を取り茶杓を握り込みて茶入の蓋を取り蓋を茶碗の右横に置く、次に茶杓にて茶を掬ひ入れ茶杓を茶碗の縁にて拂ひ其の儘茶杓を縁に載せ置き茶入に右手を添へて廻しながら茶をあけ切りになし茶入の口を右手の拇指と食指とにて拭ひ其の指を懐紙にて拭ひ茶入の蓋を閉ぢて元位に置き右手にて茶杓を取り左手にて扱ひ右手に持ち左手を茶碗に添へて茶を捌きて左手を離し茶杓を茶碗の縁にて拂ひ茶杓を茶入の上に戻す。

八、次に右手にて水指の蓋を取り薄茶點前の如く扱ひ右手にて水指の脇に立掛け直に右手にて柄杓の柄の上より取り左手にて扱ひ更に右手に持ち替へ水を汲み釜に入れ直に湯を汲みて茶碗に少し入れ柄杓は切柄杓をなして釜の上に置き右手にて茶筌を取り左手を茶碗に添へ能く茶を揉りて茶筌を茶碗の内に入れたる儘碗の縁にもたせ掛け置き再び湯を汲みて茶筌を左手に持ち茶筌の穂先より湯を注ぎながら茶碗に入れ茶筌を中に入れ置き置柄杓をなして柄杓を釜の上に載せ置き再び右手にて茶釜を持ち茶を能く揉りて後茶筌を取出して元位に置き右手にて茶碗を取り上げ左掌に載せ茶碗を常の如く廻して定座に出し續いて懐中の古服紗を取出し茶碗の下位に置く。

九、上客出でて茶碗古服紗を取込み次客との間疊の縁内に置き客方總禮をなす、上客茶碗を取り左掌に載せ頂きて茶碗の向を持ち前へ廻し茶を一口飲む、亭主は此時加減を尋ね、上客之に答へ然



る後三口半飲む、次客は上客の二口飲みたる時次禮をなす、上客飲み終れば茶碗の呑口を能く拭ひ呑口を向ふへ廻し次客へ茶碗を手渡して上客は次客に對して一禮をなす、次客は茶碗を受取り上呑の送禮と共に茶碗を頂き同じ呑口より三口半呑み三客に廻して送禮をなす、末客呑み終れば亭主は居前に向き直り釜へ水を一杓入れ置柄杓をなして釜の上に柄杓を置く、若し服紗にて釜の蓋を取りたる節は服紗を帯に挾み控へ居る。

十、亭主は茶の加減を尋ねて後其の儘一膝客付へ向き直り控へ居る、上客は茶碗を次客へ渡したる後茶銘竝に茶師の名等を尋ね亭主は之に答ふ。

十一、末客呑み終りたる後茶碗は上客の前に持ち行き席に復す、上客は茶碗を縁外に置きたる儘次禮して茶碗を一覽し次客の縁内へ送る、續いて古服紗を見次へ送る、末客見終れば上客竝に末客は共に前へ進み出會ひて末客は上客へ茶碗古服紗を返して席に復し上客は之を亭主に返す。

十二、亭主茶碗返れば右手にて古服紗を取り懐中して後同じく茶碗を取り左掌に載せ呑口を見て下に置き主客共に總禮す。

十三、次に右手にて柄杓を持ち湯を汲みて茶碗に入れ切柄杓をなして柄杓を釜の上に置き後右手にて茶碗を取り上げ左手に渡し湯を建水に捨て一應仕舞ふ挨拶を爲し客之に答禮す。

十四、右手にて柄杓の柄の上より持ち左手にて扱ひ右手にて水を汲み茶碗に入れ引柄杓を爲して柄杓を釜の上に置き右手にて茶筌を取り茶筌投じを二度爲し水を建水に捨て茶巾を茶碗に入れ膝前に置き茶筌を取りて茶碗に入れ茶杓を取り右膝先に持ちたる儘左手にて建水を少し後ろへ引き服紗を取り捌きて茶杓を拭ひ茶碗の上に載せ直ちに茶碗を少し左手へ寄せ茶入を置合し中仕舞を爲すこと薄茶點前に同じ。

十五、次に右手にて柄杓を取り扱ひて更に持ち替へ釜に水を一杓入れたる後柄杓を構へて釜の蓋を閉ぢ柄杓を蓋置の上に引き右手にて水指の蓋を取り始めの如く三手に扱ひて水指の蓋を爲す。

十六、上客は此の時茶入、茶杓袋の一覽を求む、亭主は之を受け右手にて柄杓を取り左手に渡し建水の上に懸け置き右手にて蓋置きを取り左手に渡し建水の後ろ柄杓の柄の下に置き後右手にて茶碗を疊の左方へ假置し同じく右手にて茶入を左掌に取り上げ一膝客付へ向き直りて膝前に茶入を置き服紗を常の如く捌きて蓋並に横を拭ひ服紗を下に置き茶入の蓋を取り裏を驗べて服紗の向ふへ置き服紗を取り茶入の口を拭ひて又下に置き茶入の蓋を閉ぢ右廻しに向ふ前を正し客疊へ出し後服紗を帶に挾み居前に向き直り右手にて茶杓を取り同じく客付へ持ち廻りて茶入の下位に置き又居前に向き右手にて袋を取り左掌に載せ客付に持廻りて茶杓の下位に袋の底を向ふにして打留



を茶入の方へ向け三器を並べ出す。

十七、次に居前に直り左手にて柄杓を取り右に持ち替へ柄を横にして同じく蓋置きを取り右手に持たせ一膝左方へ向き左手にて建水を持ち立ちて左へ廻り茶道口を開け勝手へ引く、次に入りて風爐前に座し右手にて茶碗を取り左掌に載せ右手を添へ立ちて右に廻りて勝手へ退き又入りて水指を持ち勝手へ引き茶道口を閉ぢ待ち居る。

十八、亭主建水を引きたる後上客は前へ進み三器を取り込み右膝脇に茶入を置き其の右に茶杓袋を並べ置き控へ居る亭主水指を引去れば上客は次禮して順次に茶入茶杓袋を一覽す。

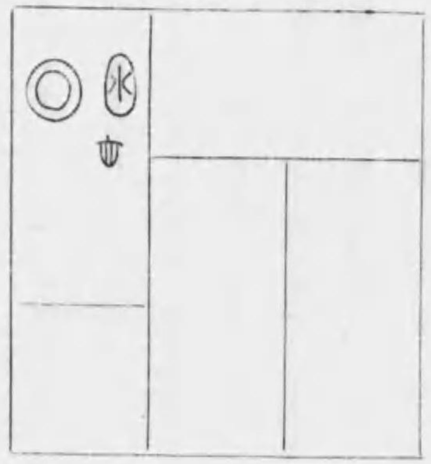
十九、末客見終れば上客並に末客は共に前に進み末客は上客に三器を返し上客は之を亭主の出したる時の打返にして返す、袋の打留は始終茶入の方へ向け置く可し。

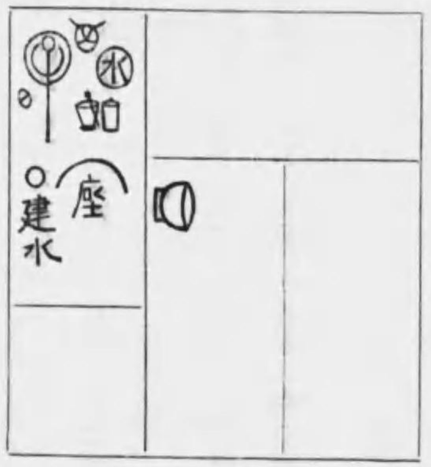
二十、三器返れば亭主は茶道口を開け内に入りて三器の前に座す、上客一禮し亭主答禮して右手にて袋を取り左掌に載せ同じく茶杓を取りて其の上に載せ又右手にて茶入を取り胸の高さに並べ持ち勝手へ引き茶道口に座して一禮す。

## 附　柄杓のこと

一、置、切、相互になすべきものなれど數服點づるときは此の限りにあらず、但し引柄杓は水の時

に限るものとす。




## 四疊半逆勝手風爐薄茶點前

一、服紗を帶の右に挾み水指を持ち左足より席に入り水指を風爐の左脇に置き右膝より立ちて左へ廻り右足より茶道口を出で次に茶入茶碗を持ち水指の前に座し茶入を水指の前客付に置き茶碗を右手に持ち替へ茶入の右方に置合し前の如く勝手に退き右手に建水を持ち居前に座す。

二、右手にて柄杓を取り左手に持ち構へて右手にて蓋置を出し小板の右前角に置き左手にて柄杓を



蓋置の上に引き建水を進め左手にて茶碗を取り右手に渡し膝前に置き右手にて茶入を取り茶碗膝との間に置き右にて服紗を取り左手に渡し服紗捌きを爲して茶入を拭ひ圖の所へ置き茶杓を拭ひ茶入の上に置き茶筌を取出し水指の眞前に置き茶入と茶筌とを斜めに流し置く、以下本勝手の打返しにして茶を點ず。

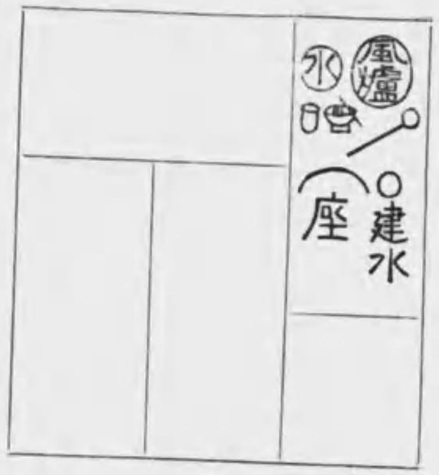
三、茶入の蓋を取りし時には茶碗と膝との間に置き茶を點じ客に出す時は左手にて出す。

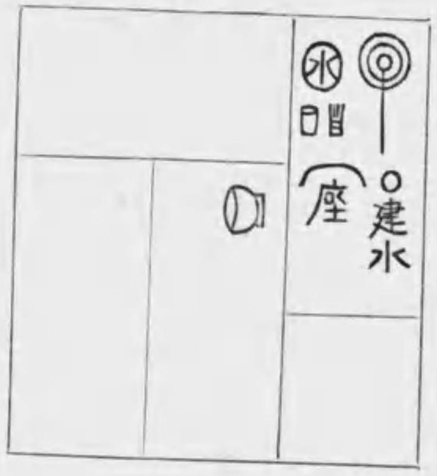
四、終りに茶筌を茶碗に入れ茶杓を取り右手に握り込みて建水を後ろに引き茶杓を握り込みたる儘服紗を取り捌きて茶杓を拭ひ茶碗に載せたる後服紗を拂ひ帶に挾み後水指の前に茶入を右手にて初の如く置き其の右に茶碗を莊り戻す。

五、水指の蓋を取るには右手より三手に扱ひ左手にて水指の右脇に立掛けて置く。

一、濃茶點前も右に示したる如く本勝手の濃茶の打返しに爲すこと。

二、廣間ならば柄杓蓋置きを右に持ち左手に建水を持ち勝手へ引きても宜し、然れども小間等踏み疊一疊のみの席なれば左手に柄杓蓋置きを持ち右手に建水を持ち引くこと。



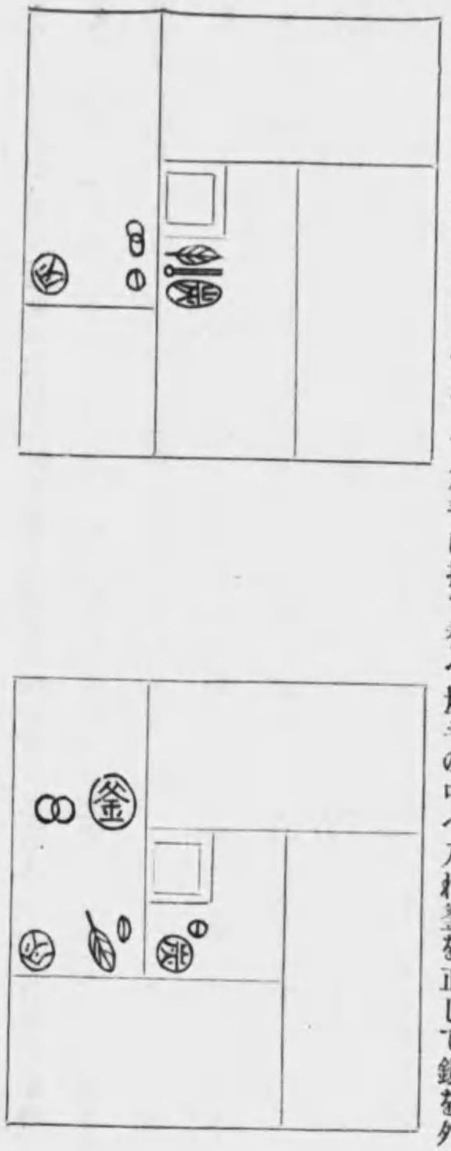

## 四疊半本勝手爐初炭手前

一、炭斗を持ち爐の右方に置き次に灰器を持ち右の方へ廻り斜に座し道具疊の隅に置き後爐の正面に居前を定め右手にて羽箒を爐と炭斗との間に置き同じく鐶を取りて炭斗の前少し左に寄りたる所へ置き同じく火箸を羽箒の右に置く、次に右手にて香合を取り左掌の上にて扱ひ右手にて炭斗の前、鐶の左方に置きて後右手にて釜の蓋を閉づ（共蓋又は婦人は服紗にて釜の蓋を扱ふ）次に鐶を取り釜に掛け置きて右手にて釜敷を取り打返して左手に渡し膝の左方に置き一膝前へ進みて釜を上げ鐶を釜に預け置き一膝左へ向き釜を疊の中央より少し右方に引き寄せ鐶を外づして釜の左方乃ち疊の中央に置き居前に向き直り右手にて羽箒を取り爐縁の右方を二羽根掃き夫れより向ふの爐縁を右より鍵の手に左横の爐縁を掃き續いて前方の爐縁を三羽根向ふへ掃き爐段の向ふの左より右前まで鍵の手に同じく左横の向より前へ鍵の手に掃き羽箒を香合の右へ斜に置く。

二、亭主爐縁を掃き初むる時に上客は一禮して爐邊へ進み次客以下も共に一禮し出でて炭を一見す。

三、次に亭主は右手にて火箸を取り右膝先の前にて突き持ち替へ下火を直し火箸を炭斗の中に入れ兩手にて炭斗を少し向へ除け置き一膝右へ向き右手にて灰器を取り持ちたる儘居前へ向き直り左手を添へて炭斗の前に爐縁へ少し掛け置き右手に灰匙を持ち灰を竪に割り其の右方の灰を掬ひて爐の向ふ中央より左へ左の中央まで、次に同じく灰を掬ひ左横中央より前の中央まで、又同じく向ふ中央より右横中央まで、次に灰匙を柄の下より持ち替へ手を逆にして右横中央より前の中央まで灰を蒔き更に初めの如く灰匙を持ち替へ灰を掬ひて下火の前に蒔き灰匙を灰器に伏せて入れ置き右手にて灰器を取り上げ一膝右へ向き灰器を元座に返し居前に向き直り右手にて羽箒を取り前の如く爐縁、爐段並に五德の向ふの爪より右左の爪を順次に箒き羽箒を元座に置き兩手にて炭斗を少し前へ寄せ右手にて火箸を取り横にして左手に持たせ右手にて直ちに胴炭を持ち五德の左

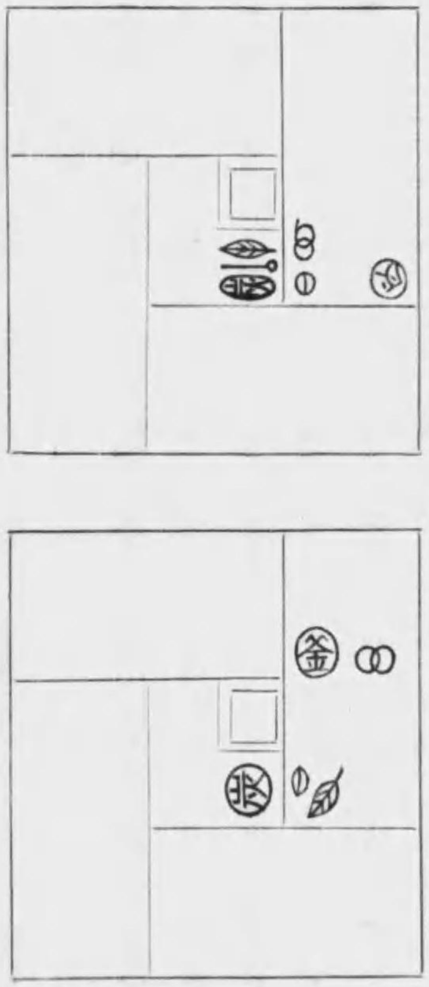
右の爪の間に手なりに入れ右手を袖の中にて拭ひ直ちに火箸を持ちて順次に炭をつぐ、點炭をつぎたる時末客より一禮し連客皆一禮して席に復す、亭主は炭をつぎ終りて火箸を炭斗の中に入れ右手にて羽箒を持ち初めの如く爐縁、爐段を掃き羽箒を炭斗の上に初めの如くに載せ置き右手にて香合を取り左掌に載せ蓋を取り初め鐶の在りし所に置き右手にて火箸を取り香を焚き火箸を元に返し香合の蓋を爲す、上客一見を求む、亭主は之を受けて香合の向前を正して爐縁の右向ふ角の脇に置き一膝左方へ向さ釜に鐶を懸け膝前の所まで引き寄せ置き居前に向き直り釜を取上げ爐にかけ左手にて釜敷を取り打返して右手に持ち替へ炭斗の中へ入れ釜を正して鐶を外づし炭斗の



中に入れ一膝下り後羽箒にて釜の蓋を箒き羽箒を炭斗の上に返し釜の蓋を切る次に一膝右へ向き右手にて灰器を持ち勝手へ引き、次に入りて炭斗の前に座し炭斗を引く、香合返らば入りて香合の前に座し一禮して勝手へ引く。

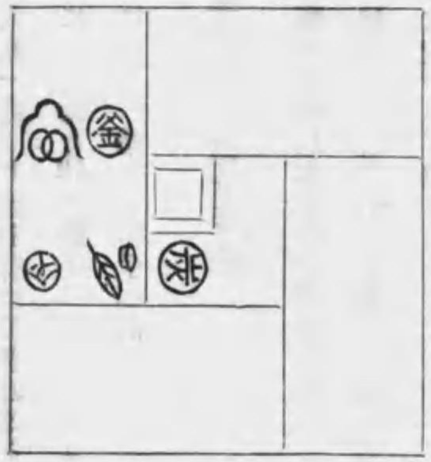
## 四疊半逆勝手爐炭手前

一、逆勝手は概ね本勝手の打返しにして灰器を定座に置き又爐縁の傍らに置く時には左手にて爲す初め羽箒火箸は左手にて炭斗の脇に出し香合を出す時には右手を以て爲す、火箸並に羽箒を使ふ時には左手にて取り右手に持替へて扱ひ釜を上げ定座へ引き付け鐶を外づし右手にて釜の右に置く其他爐風逆勝手の時に同じ。



## 釣釜の炭手前

一、釣釜の扱ひは常の如く羽箒、火箸、香合を出して釜の蓋を閉め次に左手にて鍵の頭と蔓とを下より抱へ持ち右手にて小鎖を凡そ二つ三つ程上げ一膝進み、次に釜敷を常の所に出し左手にて蔓を上より握り持ち右手の四指を右の鐶にかけて釜を上げ置き蔓を左に持ち右にて鐶を外づし右に蔓を持ち替へ左の鐶を外づし蔓を兩手にて疊の眞中に置き釜を鐶にて定座まで引付け鐶を外づし蔓の眞中に置く、若し勝手付の方に壁ある時又は棚莊りある時は蔓を壁に立てかけ置き鐶を常の所に置き鎖を五つ程繰り揚げ置く。




二、炭をつぎ終り香を焚き鎖を五つ程繰り下げ置き釜の鐶を掛け初め釜を上げたる所まで引寄せ蔓を取り左手に持ち右手にて右方の鐶を掛け初め釜を揚げたる如く持ち鎖に初め揚げたる時と同様に掛け後釜敷を炭斗の中に入れ左手にて初めの如く右手にて小鎖を持ち釜を始め繰り揚げし丈け下ろし膝後に下り常



の如く釜の蓋を掃き蓋を切りかけ置く。

此の釣釜は二三月のころより用ふ、又鎖の扱ひは自在の扱ひに同じ。

## 爐本勝手後炭手前

一、炭斗に胴炭並に香合を除き枝炭を逆しまに立て炭斗の前に置き其他常の通り組入れ兩手にて持出し爐の右脇に置き次に灰匙を仰向け其の上に香を直かに置き（香合を載せてもよし）灰器を持出して定座に置き居前に向き直り羽箒を爐縁と炭斗の間に置き釜の蓋を閉め釜に鐶を懸けて置き釜敷を取出し左膝脇に置き一膝前へ進み釜を上げ釜を疊の左方に手なりに置き常の通り鐶を外して釜の左に置く。

二、次に居前に向き直り羽箒にて常の如く爐縁を掃き羽箒を常の所に置き、次に火箸を取り下火を直し火箸を炭斗の中に入れ炭斗を少し向ふへ寄せ一膝右へ向け灰器を取り常の所に置き灰匙に香を載せたる儘取りて香を爐中に投じて後灰を掬ひ常の如く蒔きて灰器を元に返し羽箒を取り爐縁の右縁を向ふより前へ次に前縁を左より右へ掃き箒き爐段も又同じく掃きて羽箒を元に返し炭斗前をへ寄せ火箸を取り炭を次ぎ火箸を元に返し羽箒を取りて爐縁、爐段を初めの如く掃き羽箒を

炭斗の上に載せ左へ向き釜へ鐶を掛けて疊の右方へ引き寄せ手なりになし鐶を外して釜の左に置き右へ向き直り灰器を持ち勝手へ引き水指に茶巾蓋置を載せ常の如く持ちて釜に向ひて座し水指を鐶の左に置き釜へ水をさす。

三、水をさし終つて茶巾にて釜を拭ひ水指を勝手に引き又入つて釜を掛け炭斗を持ち退く。

四、若し香合を灰匙に載せて用ゆる時も香は灰を蒔きたる後に焚く可し、後炭に限り炭をつぎて後香を焚くことなし。

## 四疊半本勝手 爐薄茶點前

一、水指を運び出し道具疊の向眞中より向ふ、圖の所に置き、次に茶入、茶碗を持出して水指の前に置合せ次に建水を持ち席に入り茶道口を閉ざし後居前に進み建水を左膝脇に置く。

二、左手にて柄杓を取り右手を添へ構へて常の如く蓋置を取出して爐の右脇前の方に置き右手にて柄杓を持ち蓋置の上に圖の如くに引き左手にて建水を少し前に進め置き體の居ずまいを正す、即ち爐縁の左前の内角を體の眞になる樣に居前を定む。

三、左手にて茶碗を取り右手に持替へ膝の前に置き次に右手に茶入を取り茶碗膝ととの間に置き左手にて服紗を取り捌きて右手に持ち左手にて茶入を取り拭ふこと風爐點前に同じ、茶入を拭ひ終りて水指と爐縁の左前角との間に水指の方へ少し寄りたる方へ置き次に茶杓を拭ひ茶入の上に手なりに置き茶筌を取り出して茶入の右に斜に置き茶碗を少し前に引き寄せ服紗を帶に挾む（但し共蓋又は婦人は服紗にて釜の蓋を扱ふ）

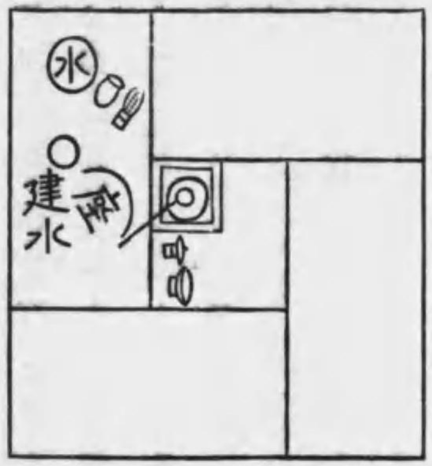
四、次に右手にて柄杓を取り構へて釜の蓋を取り蓋置の上に置き茶巾を其の上に載せ柄杓を左手にて扱ひ右手に持替へ湯を汲み茶碗に入れ柄杓の合を釜の口に落し入れ俯向けて柄を爐縁の前三つ割りの所に引き茶筌投じを爲し順次茶を點じて茶碗を釜の蓋の向ふ少し右へ寄りたる方へ出す。

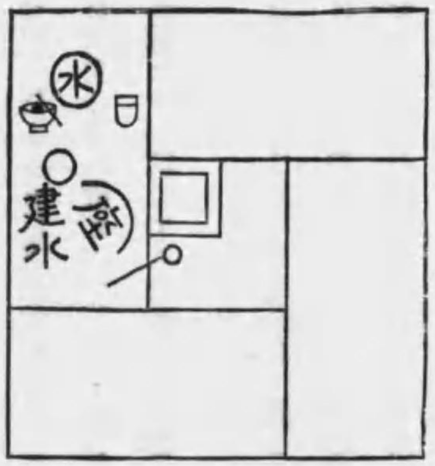
五、水指の蓋は右手にて取り左手に持替へて水指の左脇に立掛け置く。

六、茶碗返れば亭主之を膝前に取入れ仕舞ふこと、風爐點前に同じ終りに茶杓を拭ひ茶碗に載せ服紗を建水の上にて拂ひ帶に挾み、次に右手にて茶入を少し左へ寄せ右手にて茶碗を取り左手に渡して水指の前に初めの如く茶入れと置合し柄杓を取り釜へ水をさし柄杓を構へて釜の蓋を爲し柄杓を蓋置きの上に引き左手にて水指の蓋を取り右手にて蓋を閉め、次に右手にて柄杓を取り柄を横に爲し節の所を握り込み左手にて蓋置きを取り右手に持たせ水指の正面に向き建水を持ち茶道口に座し建水を膝前に置き左手にて蓋置を建水の右脇に置き柄杓を左手にて扱ひ俯向けて建水の

上に載せ右手にて襖の引手を持ち茶道口を半ば開け次に左手にて開け切り柄杓蓋置建水を前の如くに持ちて勝手に退く。

七、若し茶入、茶杓の一見を求められたる時は柄杓を右にて取り左手に渡し建水の上に俯向けて載せ置き右手にて蓋置を取り左掌に載せ水指の正面へ持廻り左手にて柄杓の柄の下に置き右手にて茶碗を疊の左方へ假置し右手にて茶入を取り左掌に載せ客付へ持廻り客に正面して茶入を膝前に置き常の如く拭ひて爐の右脇鎖付より少し手前の所へ出し服紗を帶に挾み又水指の方に向き右手にて茶杓を取り左手に持ち居前に向き茶入の下位へ杓を並べ置く。






## 四疊半本勝手濃茶點前

一、水指を疊の眞中より凡そ七寸程向ふに左右の中央に置き其の前に茶入を莊り置く。

二、亭主茶道口を開け茶碗を持ち水指の前に座し茶碗を左へ假置し茶入を少し右に寄せ左手にて茶碗を取り右手にて扱ひ左手にて茶入と置合し次に建水を持ち出で茶道口を閉ざし居前に座し柄杓を取り構へて蓋置を取出して定座に置き柄杓を其の上に引き主客共に一禮して後建水を進め居ずまへを正す。

三、次に左手にて茶碗を取り右手にて膝前に置き茶入を取り茶碗と膝との間に置き茶入の袋を外して水指の左脇に置き服紗を取り四方捌きを爲して常の如く疊み茶入を拭ひ水指と爐緣との間に置き服紗を捌き直して茶杓を扱ひ茶入の上に蓋の摘みを左にして載せ置き茶筌を出して茶入をと斜めに置合し服紗を二つに折返して水指の蓋を拭ひ服紗を左手に持たせ右手にて茶碗を前に引き茶巾を水指の蓋の上に載せ服紗を帶に挾む。

四、右手にて柄杓を取り構へて釜の蓋を取り蓋置の上に置き湯を汲みて茶碗に入れ柄杓を構へて釜の蓋を閉め切り柄杓を蓋置の上に引き茶筌投じを爲して茶筌を元位に返し湯を建水に捨て茶巾を

取り茶碗を拭ひ茶巾を水指の上に戻し茶杓を取り茶入を取り茶を掬ひ入れ茶杓を茶碗の縁に載せ茶入を廻して茶を入れ、茶入を元位に戻し茶杓にて茶を捌き茶杓を元の如く茶入の上に置き柄杓を取り構へて釜の蓋を取り蓋置の上に置き湯を汲みて茶碗に入れ柄杓を釜にかけ置き茶筌を取り茶を揑り茶筌を茶碗に入れたる儘湯を汲みて茶碗に入れ柄杓を前の如く懸け置きて茶筌を持ち茶を揑りて茶筌を元位に戻し茶碗を取り上げ客に出す。

五、客は風爐、薄茶の如く茶を呑み茶碗を一覽し終りて亭主に返す。

六、上客一口呑みたる時亭主は服加減を尋ね續いて柄杓を取り構へて釜の蓋を常の如く爲し柄杓を建水に載せ蓋置を取りて左手に渡し建水の後に置き客へ正面して控へ上客より茶銘其他聞きたる時之に答へ末客呑み切れば居前に向き直り左手にて蓋置を取り右手に持替へて常の所に置き又左手にて取り構へて釜の蓋を取り蓋置の上に載せ柄杓を釜に懸け右手にて茶巾を取り釜の蓋の上に置き同じく右手にて水指の蓋を取り左手に持替へ水指の左脇に立掛け置き柄杓を取り扱ふて右手に持替へ釜へ一杓水をさし控へ居る。

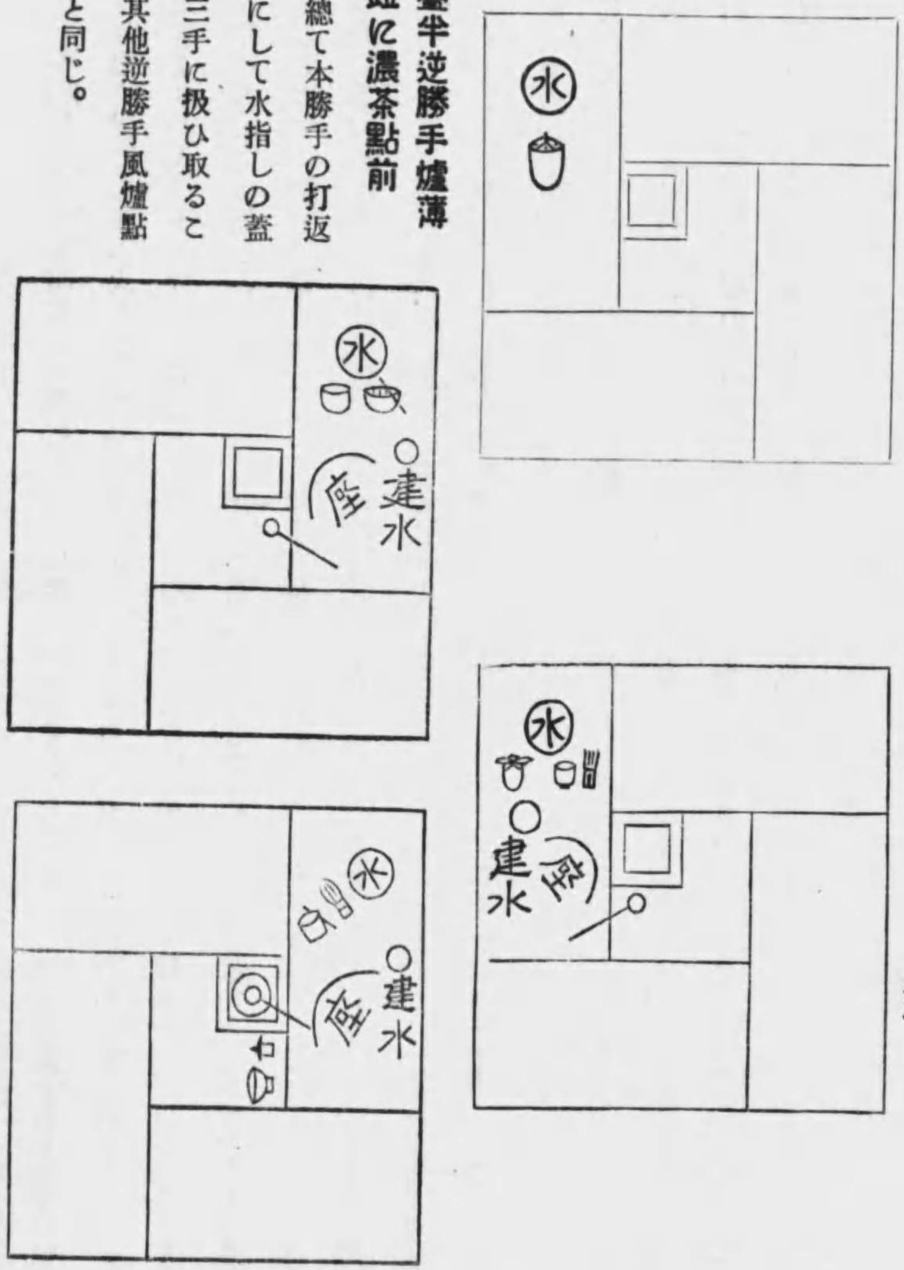
七、茶碗返れば之を取込み主客共に總禮し湯を汲みて茶碗を洗ひ仕舞の挨拶を爲し水を汲みて茶筌投じを爲し水を建水に捨て茶巾を茶碗に入れ同じく茶筌を入れ次に茶杓を取り建水を引き服紗を捌きて茶杓を拭ひて茶碗に載せ服紗を拂ひて帶に挾み茶入れを少し右に寄せ茶碗を取り茶入れを初めの如く置合し釜へ水を指して釜の蓋を閉め柄杓を蓋置の上に引き水指しの蓋を爲す。

八、上客より茶入、茶杓袋の一見を求められ、亭主之を受けて柄杓を取り建水の上に載せ蓋置を取り左掌に載せて水指しの正面に持廻り建水の後ろに置き茶碗を右手にて疊の左方に假置し茶入れを客の正面に持廻りて常の如く拭ひて爐の右脇に出し服紗を帶に挾み水指しの正面へ向き直りて右手にて茶杓を取り左に持ち居前へ向き茶入れの下位へ出し其儘左手にて袋を取り右手にて袋の横を持ち左掌に載せ更に客の正面へ向け直りて茶杓の下座へ竝べ出し水指しの正面に向き左手にて柄杓を取り柄を横にして右手に持ち替へ蓋置を共に持ち左手にて建水を持ち勝手へ引き次に茶碗を引き水指しを引くこと常の通りとす。

九、共蓋又は婦人は服紗にて釜の蓋を扱ふこと常の如く最初釜の蓋を取りて服紗を右膝先に假置し茶碗に湯を汲みて柄杓を構へ服紗にて釜の蓋を閉め同じく服紗を右膝先に假置し茶筌投しを終りて柄杓を構へ服紗にて釜の蓋を取り服紗を建水の後ろに置き茶筌を點ずること前に述べたるが如し中仕舞を解きて釜に水をさしたる後服紗を帶に挾む。

## 四疊半逆勝手爐薄茶並に濃茶點前

一、總て本勝手の打返しにして水指しの蓋は三手に扱ひ取ること其他逆勝手風爐點前と同じ。






## 爐灰拵へ方

爐の灰は細かくあれば宜しいのでありますが、多くは生灰を細かく篩るひ番茶の煮汁を注ぎ乾かし幾度も之を繰り返し濃褐色になつたのを蓄へ置きまして使用するのが普通になつてをります。

爐を閉づる時又は風爐を片付ける時は灰を全部取つて他に蓄へて置きます。これは濕氣の爲に灰や爐を損する虞れがあるからである。

## 利休茶道百道歌

其道に入らんと思ふ心こそ我身ながらの師匠なりけれ。

習ひつゝ見てこそ習へ習はずに善惡いふは愚なりけり。

志ふかき人にはくり返しあはれみそへて奥を敎へよ。

はぢをすて人に物とひ習ふべし是ぞ上手の基なりける。

上手にはすきと器用と功つむと此三つ揃ふ人ぞ能くしる。

手前には弱みを捨てゝたゞ強くされど風俗卑しきを去れ。

手前には強みばかりを思ふなよ強きは弱く輕く重かれ。
茶の手前ものしずかにときくものを麁粗になせし人は誤り。
何にても道具扱ふ度ごとに取る手はかるく置手重かれ。
濃茶には手前をすてゝ一筋に服の加減と息をちらすな。
濃茶には湯加減熱く服は尙泡なき樣にかたまりもなく。
とに角に服の加減を覺ゆるは濃茶たび度點てよくしれ。
よそにては茶を汲みて後茶杓にて茶碗の緣を心してうて。
中繼は胴を横手にかけてとれ茶杓は直に置くものぞかし。
畫には蓋半月に手をかけて茶杓は丸く置くとこそしれ。
薄茶入蒔繪彫もの文字あらば順逆覺えあるかふとしれ。
肩衝は中繼とまた同じこと底に指をばかけぬとぞしる。
文琳や茄子丸つぼ大海は底にゆびをばかけてこそもて。
大海をあしらふ時は大指を肩にかけるぞ習ひなりける。
口廣き茶入の茶をば汲むと云ふ狹き口をばすくふとぞ云ふ。



筒茶碗深き底よりふき上り重ねて內へ手をやらぬもの。
乾きたる茶巾使ば湯を少しこぼし殘してあしらふぞよき。
炭置きはたとへ習ひに背くとも湯のよくたぎる炭は炭なり。
客になり炭つぐならば其度に薰物杯はくべぬ事なり。
炭つかば五德挾むな十文字緣をきらすなつり合を見よ。
焚殘る白炭あらば捨ておきて又餘の炭を置くものぞかし。
炭をくも習ひばかりに拘りて湯のたぎらざる炭は消炭。
崩れたる其日炭をとりあげて又焚きそへる事はなきなり。
風爐の炭見る事はなし見ぬ迚も見ぬこそ猶も見る心なれ。
客になり底取るならばいつにても圍爐裡の角を崩し靈すな。
客になり風呂の其內見る時は灰崩れなん氣づかひをせよ。
墨跡を懸ける時はたくぼくを末座の方へ大分はひけ。
繪の物を掛ける時にはたくぼくを印ある方へ引置くもよし。
冬の釜圍爐裡緣より六七分高くすえるぞ習ひなりける。

品々の釜によつての名は多し釜の總名鑵子とぞいふ。
繪掛物左右向き向ふむきつかふも床の勝手にぞよる。
姥口は圍爐裡縁より六七分低くすえるぞ習なりける。
置合せ心をつけて見るぞかしふくろの縫目疊目にをけ。
はこび點水指置くはよこ疊二つ割りにてまん中にをけ。
茶入又茶筌かねをよくも知れ跡に殘せる道具めあてに。
何にても置き付け歸る手離は戀しき人にわかるゝと知れ。
水指に手桶出さば手は横に前の蓋とりさきにかさねよ。
餘所などへ花を送らば其花の開き過しはやらねものなり。
釣瓶こそ手は竪に置け蓋取らば釜に近付く方と知るべし。
小板にて濃茶を點ば茶巾をは小板の端に置くものぞかし。
掛物の釘打ならば大輪より九分下げて打釘も九分なり。
喚がねは大と小とに中々に大と五つのかずをうつなり。
茶入より茶を掬ふには心得て初中後すくへ夫が祕事也。



湯をくむは柄杓の心つきの輪のそこねぬやうに覺悟して汲め。
燈火に陰と陽との二つありあかつきは陰よいは陽なり。
古は夜會などには床の內掛もの花はなしとこそきけ。
爐のうちは炭斗ふくべ杓の火箸陶器香合ねり香としれ。
古へは名物などの香合へ直にたきもの入れぬとぞきく。
風爐のとき炭は菜籠にかね火箸ぬり香合に白檀をたけ。
蓋置に三つ足あらば一つ足まへにつかふと心得ておけ。
二疊臺三疊臺の水指は先づ九つ目に置くが法なり。
茶巾をばながみ布巾一尺によこは五寸のかね尺としれ。
服紗をば竪は九寸餘よこはゞは八寸八分かね尺にせよ。
うす板は床かまちより十七目または十八十九目に置け。
うす板は床の大小また花や花生けによりかはるしなゝ。
花入のをれ釘うつは地敷居より三尺三寸五分餘もあり。
花入に大小あらば見合せよかねをはづして打つがかね也。

竹釘は皮目を上にうつぞかし皮目を下になす事もあり。
三つ釘は中の釘より兩脇を二つわりなるまん中にうて。
三幅の軸を掛るは中をかけ軸さきをかけつぎに軸もと。
掛物を掛て置くには壁付を三四分すかしをくときく。
花見より歸て人に茶の湯せば花鳥の繪をも花も置まじ。
時ならず客の來らば手前をば心は草にわざを慎め。
釣舟はくさりのながさ床により出船入船うき船としれ。
柄杓にて湯をくむ時の習には三つの心得ある物ぞかし。
湯を汲みて茶碗に入るゝ其時の柄杓のねぢは肱よりぞする。
柄杓にて白湯と水とを汲時はくむと思はじもつと思はじ。
茶を振は手さきを振と思ふなよ臂より振れと夫が祕事也。
床に又和歌の類をば掛るなら外に歌書をば莊らぬと知れ。
外題ある物を餘所にて見る時は先づ外題をば見せて披けよ。
羽箒は風爐に右羽よ爐の時は左羽をば使ふとぞ知る。



名物の茶碗出たる茶の湯には少し心得かはるとぞ知る。
曉は數寄屋のうちも行燈に夜會などには短けいを置け。
ともし火に油を注は多くつげ客にあかざる心得と知れ。
壺などを床にかざらん心あらば花より上に莊り置くべし。
風爐濃茶必ず釜に水さすと一筋におもふ人はあやまり。
右の手を扱ふときはわが心左のかたにありと知るべし。
一手前點るうちには善惡と有無の心のわかちをも知る。
なまるとは手つゞき早く又遲く所々にむらあるをいふ。
手前には重きを輕く輕きをば重くあつかふ味を知れ。
盆石をかざりし時の掛物に山水などはさしあひと知れ。
板どこに葉茶壺茶入品々をかざらで莊る法もありけり。
床の上に籠花入を置く時は薄板などはしかぬものなり。
掛物や花を拜見するときは三尺ほどは座をよけて見よ。
稽古とは一より習ひ十を知り十より歸るもとのその一。

茶の湯をば心に染めて目にかけず耳を潜めて聞く事もなし。
茶を點ば茶筌に心よくつけて茶碗の底へ強くあたるな。
目にも見よ耳にも觸よ香を嚊ぎて事をとひつゝ能く合點せよ。
ならひをば塵芥ぞと思へかし書物は反古腰ばりにせよ。
水と湯と茶巾茶筌に箸楊枝柄杓と心あたらしきよし。
茶はさびて心は厚くもてなせよ道具はいつも有合にせよ。
茶の湯には梅寒菊に木葉實落青竹枯木あかつきのしも。
茶の湯とは只湯を沸し茶を點てゝ飲む計なる事と知るべし。
もとよりもなきいにしへの法なれど今ぞ極る本來の法。
規矩作法守り盡して破るとも離るゝとても本を忘るな。

## 六、茶事一斑

一、茶室内の準備整ひたるときは銅鑼を七つ打ち（大、小、大、小、中、中、大）外待居にては其の應諾を木磬にて對ふ。



二、露地は据石に打水して清淨とし落葉等は塵穴に投ず。
三、露地に入るに晴天には草履、雨天には庭木履に笠を要するものなれば露地口に其の人數だけの準備をなすものとす。
四、外待合にて服裝を整へ用達等を一切濟ますものとす。
五、内待合にて息ひ案内を待つ。
六、案内者は案内の旨を述べて蹲踞の前に蹲り水杓を取り其の附近の樹木に打水して清淨とし後水にて左手、次に右手と清め左掌に水を受け口嗽ぎて後杓の柄に水を流し淺き杓なれば俯向けに深き杓なれば左向き横に杓を蹲踞の前に置く、客は水にて左手、右手と清め口嗽ぐことは案内者に同じ。
七、室内にては先づ床の掛物又は花及び風爐又は爐を觀賞して下座に假座し殆ど入り終るを待ちて夫々本座に着く。
着座は膝前疊約八寸を明けて着座するを常とす。
八、前席は懐石の席にて陰の席と稱し床に掛物を懸け窓には光線を和らぐ爲に簾を垂る、亭主の挨拶に依りて飯汁菜と食す。

九、前席終れば後席は陽の席と稱し床の掛物窓の簾は撤し床壁には花を懸く客には菓子、濃茶、次に薄茶の出づるものとす。其他前陳の如し。

十、室内にては客は膝行し、亭主はすり足にて敷居又は疊の緣は踏まず低く越ふるを常とす。

以上茶道の三要諦を先づ理解して後作法を自覺すれば心身の統一自らなり事に當りて沈着なる精神を以て行動し眞心を以て人に接す之れ我が茶道の目的とする所なり。

青苔日厚自無塵　　利休

所懷十回

茶の湯とは心の渴を醫するなり
　するの濁りをいかで汲まゝし
現世のよろづのさまをわふる身に
　こゝろをすます茶の湯やすけし

## 附錄　珠光

茶家の祖、香樂庵南星又獨盧軒と號し、休心法師と曰ふ、通稱村田茂吉南都の杢市檢校の男。少時南都の稱名寺の僧となり、十餘年間寺中法林庵に住す、後法業を怠り破門せらる。年三十の頃京都紫野大德寺に至り法業を一休禪師に受く、常に睡眠を好むを以て醫に問ひ茶は興奮の効あるを知り樗尾の茶を喫せり、後ち來院の者あれば之を喫せしむ。偶〻第六代將軍足利義政、珠光の茶道の妙術を賞し命じて還俗せしめ草庵を三條の邊りに造らしむ。其の室四顧四莚の外半莚を加へたるのみ、珠光庵主の額を下されしと云ふ。珠光唯一鐺を貯へ或は參を和して自ら喫し、或は茶を煎じて賓友を會し和歌を以て自ら娛しむ。時人交を結ぶ者多し、本朝茶道の宗匠は珠光より始まる。文龜二年五月十五日歿す。年八十一紫野大德寺眞珠庵に葬ると云ふ。

## 千宗易

利休と號し、通稱田中與四郎、其の先は室町幕府に仕へ千阿彌と名づく子孫因りて千を族稱とせり。十七歳にして茶道を學ぶ、茶家流に臺子傳ありて珠光之を篠道耳に傳へ、道耳之を宗悟に傳へ、宗悟之を紹鷗に傳へ、紹鷗之を宗易に傳ふと云ふ（或は曰ふ宗易は道珍に茶を學ぶと云ふ）織田信長に仕へて安土城に伺候せしが後豐臣秀吉に仕へて恩遇優渥常に隨行せり。天正十六年後陽成天皇聚樂第に幸ありし時秀吉關白の職にあり、茶技に長ぜる者を選び奏請して綱位に陞す時宗易固辭して受けず

居士と稱せんことを請ふ、秀吉乃ち紫野大德寺の僧古溪に命じて利休居士の號を授けしむ。宗易自ら拋筌齋と云へり、古溪に師事して禪を學ぶ、此の年十月秀吉北野に大茗醼を行ひ宗易をして之を督せしむ。其の制定する所は後人茶事の則とし世に敬重せらる、後茶器の新舊可否を鑑定して其の價數を決し大に富を致せり。

宗易女あり、吟子と云ふ、艶麗なり、天正十八年秀吉黑谷山徑を逍遙して吟子を認め宗易に命じて之を召す、宗易既に他に嫁約あるを以て之を固辭す、秀吉之を恚る、僭言之に乘じ十九年二月二十八日中村一氏等を遣はして監使とし死を共の家に賜ふ、宗易命を拜し花を活け茶を點じ阿彌陀堂釜、鉢、俳茶碗及び石燈籠を細川忠興に贈り自製の茶匙、織條茶碗を宗嚴に與へ數寄屋の床上に默座し恬然として絶命の偈（人生七十、力圍希咄、吾這寶劍、祖佛共殺。）を賦し割腹して死す。年七十一、宗嚴首を直垂に裹みて一氏に達す、秀吉石田三成に命じて首を鈎懸に載せ一條戻橋に梟せしむと云ふ。

或は云ふ宗易資財を投じて閣を紫野山門上に架し諸尊像と共に己の木像を置く、秀吉之を怒りて死を賜ひ紫野大德寺の僧古溪亦事に座して糺彈を蒙る、其の木像永く舟岡山に拋棄しありしを宗旦の子翁閑尋ね出して其の首を用ひて利休堂の像を作ると云ふ（石鹿隨筆には宗易六十九にて秀吉の旨に違ひ死を界浦に於て賜はると）

## 千宗佐

千家表の祖、宗易の孫宗旦の第二子、江岑と號し、堪笑軒蓬源齋と稱す。世々茶事を以て紀伊侯に仕へ京都にて宗易の造くる不審庵に住す。

## 千宗室

千家裏の祖、宗易の孫宗旦の第三子、臘月庵玄室と云ひ後仙叟と號し、京都今日庵に住す。茶事を以て加賀侯に仕へ後仕を罷む。

## 小堀政一

遠州流茶式の祖、父正次世々近江に住す、政一通稱作助と呼ぶ。豐臣秀吉に仕へ後德川家康に仕へて遠江一萬石を賜ひ從五位下に叙せられ遠江守と稱す。禁裏若くは柳營の作事奉行を勤め、元和九年伏見奉行に補せらる職にあること二十四年、正保四年二月六日卒す。年六十九點茶法を古田重能に習ひ兼ねて和歌書畫を能くし活花の法に通ず。又器物を監定するに委し常に松花堂と交り親し、春屋國師に參禪し剃髮して宗甫大有居士と稱し、孤蓬庵を紫野に剏す嘗て茶事を以て三代將軍德川家光の侍者たり。

昭和七年一月二十七日印刷
昭和七年二月　一　日發行　（非賣品）

財團法人神戸山手高等女學校內
編輯兼發行人　江　田　重　雄

神戸市神戸區花隈町三二二
印刷人　松　井　梅　藏

神戸市神戸區神戸港地方口一里山一
發行所　財團法人　神戸市山手高等女學校懇談會

終